Supplementary Classes of Japanese Language

***Chikako Ishikawa, Yukiko Muramatsu, Yumiko Yoshimura**

This paper is to report how the supplementary classes of Japanese language have been offered at Toyohashi University of Technology for last two years. In section 2, we present quantitative data regarding the supplementary classes of Japanese. In section 3, we describe why the classes have been offered. In section 4, we introduce the data concerning the students of the supplementary classes with regard to their status and native countries, etc. In section 5, we state their needs and the goals of studying Japanese at the supplementary classes. In section 6, we explain how the classes have been conducted in relation to teaching materials, methods and a variety of practices. In section 7, we refer to the results of the classes. In the final section, we conclude this paper with prospects for the future.

* Part-time lecturer in charge of extra-curricular classes, Toyohashi University of Technology

外国人留学生日本語課外補講の現状と課題

＊石　川　智嘉子，村　松　由起子，吉　村　弓　子

1. はじめに

豊橋技術科学大学で石川が外国人留学生日本語課外補講を担当するようになってから，2年が経過した。現在（1999年10月末）は8クラス目（初級クラス）を継続開講中である。1997年9月から1998年7月までは吉村が，1998年9月から現在までは村松が，補講担当事務局，補講担当者および補講受講者の間をコーデイネートした。日本語課外補講は，該当者がいて，かつ受講希望があった場合に開講される。過去2年間は常に受講希望をもつ該当者が存在したため，継続的に開講されてきた。通常，大学推薦の国費研究留学生の受け入れに合わせて11月から初歩クラスが開始され，それが翌年度末まで継続開講されてきた。クラスサイズに余裕がある場合は，大学の正規学生に加えて，研究生，研究員等も受講が可能である。実際，この2年間の補講クラスの顔ぶれは，国籍，身分，日本語の学習歴とそのレベルなど，多岐にわたる傾向にあった。

本稿は，実際に日本語課外補講がどのように行われてきたかを報告するものである。それによって，今後の課題を明らかにしたい。

2. 日本語課外補講の開講状況について

石川の担当する日本語課外補講は1997年9月から開始された。ここでは現在までの補講実施状況について年度順に述べる。なお，ここで用いられるクラスのレベルは，対象者の日本語既習時間が皆無のものを初歩クラス，50時間未満のものを初級クラス，100時間程度を初中級クラスとしている。

(1)　1997年度　初級クラス：　97年9月3日～98年3月20日
（60分×2／週）　全50時間　（受講者数：14名）

＊豊橋技術科学大学謝金講師

(2) 1997年度 初歩クラス： 97年12月9日～98年3月20日
(120分×2／週) 全46時間 (受講者数：7名)

(3) 1998年度 初中級クラス 〈(1) の継続クラス〉：
98年5月6日～7月31日
(60分×2／週) 全26時間 (受講者数：10名)

(4) 1998年度 初級クラス 〈(2) の継続クラス〉：
98年5月6日～7月31日
(60分×2／週) 全26時間 (受講者数：16名)

(5) 1998年度 初級クラス 〈(4) の継続クラス〉：
98年9月2日～99年3月17日
(60分×1／週) 全25時間 (受講者数：16名)

(6) 1998年度 初歩クラス： 98年11月4日～99年3月17日
(60分×2／週) 全33時間 (受講者数：15名)

(7) 1999年度 初級クラス 〈(6) の継続クラス〉：
99年4月21日～7月30日
(60分×2／週) 全27時間 (受講者数：16名)

(8) 1999年度 初級クラス 〈(7) の継続クラス＞：
99年9月1日～2000年3月17日
9～10月：(60分×1／週)，11～3月：(60分×2／週)
全42時間 (受講者数：7名：10月末現在)

(9) 1999年度 初歩クラス (予定)：
99年11月5日～2000年3月24日
(60分×2／週) 全36時間

最初のクラスは初級クラスで，97年9月からスタートした。その後，大学推薦の国費研究留学生の受け入れ時期に合わせて，11月 (97年度は12月) から日本語学習歴の無い人を対象に初歩クラスが開始された。そしてこの初歩クラスは，翌年度末まで継続された。つまり，(1) のクラスは受講希望者すべてに日本語学習歴があったので，最初から初級クラスとして開講されたが，

(2) は「あいうえお」から始まる初歩クラスとして開講され，翌年度まで継続されて初級あるいは初中級のレベルまで進められた。よって，(1) および (3) は全76時間，(2)，(4)，(5) は全97時間，(6)，(7)，(8) は全102時間で継続クラスが修了した（する）ことになる。

次に出席状況について述べる。上で挙げた受講者数は受講の申し込みをした人数である。そのうち実際の出席者数は最も多い時で12名，最少で1名である。各回の出席率（出席者数／申込者数）の合計を単純に全回数で除して，1回あたりの平均出席率を算出すると，クラス別出席率は以下のようになる。

(1) 79.0％	(2) 75.7％	(3) 80.5％	(4) 80.1％
(5) 84.0％	(6) 80.7％	(7) 73.6％	(8) 80.5％

もとより補講クラスは出入りがあり，途中から受講を始める人や，途中で別のクラスに移ったり，あるいは帰国したりする人が必ずいるが，各クラスの平均出席率は，7～8割となっている。毎回のクラスの規模については，話す・聞くを中心とするクラスでは，10名以下の大きさは理想に近い。また各クラスで，最初から最後まで，ほぼ皆勤に近い状態で出席する受講者が，必ず存在する。

3. 日本語課外補講の位置づけ

課外補講は，大学の正規授業では十分でない部分を補うために開設されるものである。日本語に関して言えば，大学の正規の授業では最も易しい「日本語S」でも，最低110時間程度の日本語学習経験を要求している。しかし大学推薦の国費研究留学生や短期交換留学生は，日本語の学習経験が皆無，あるいは経験があっても110時間で到達するレベルには至っていない場合が多い。

彼らは研究に関しては英語等で行えるが，日常生活や，研究室での日本人学生との会話，あるいは大学の事務手続き等で日本語を必要とする場面を避けて通るわけにはいかない。外国人留学生は1年間は大学敷地内にある国際交流会館に住むことができるが，それ以後は，公営あるいは民間住宅などに引っ越さなければならない。そこでは，国際交流会館に住んで大学の研究室に通う生活に比べ，さらに日本語の必要性が増すことは明らかである。ところが大学周辺には日本語学校等の日本語教育機関がほとんどない状態であり，また交通手段や時間的，経済的な問題もあって，大学での日本語の学習機会が求められてきた。

このような要求に応じるために日本語課外補講はこの2年間開設されてきた。単位の取得はできないが，大学の関係者なら本人が希望する限り，正規の学生以外でも，クラスサイズに余裕があれば，いつでも受け入れられる。たとえば，昨年11月からスタートした初歩クラス (6) では，12月から2月まで毎週のように日本語学習歴のない人が1人ずつ7人，受講を希望してきたが，その都度受け入れてきた。また，受講者が突然，短期留学の特別研究学生を連れてきて，教室で初めて対面する，といったこともしばしば起こった。

4. 受講者の背景

ここでは受講者の　プライバシーの保護に配慮しながら，クラスでの口頭でのやりとりや手元にある記録，および石川が受講者に対して行ったアンケートなどから，受講者の背景について述べることにする。

受講者の本学での身分は様々であるが，以下，クラスごとに簡単にその構成を記しておく。

クラス	*正規学生	研究生等	研究者等	JICA研修員	教職員	合計
(1)	6	4	3	0	1	14
(2)	0	5	2	0	0	7
(3)	5	2	3	0	0	10
(4)	2	4	5	5	0	16
(5)	2	8	5	1	0	16
(6)	0	4	6	4	1	15
(7)	2	4	5	4	1	16
**(8)	2	2	3	0	0	7

注）　* 博士，修士課程在籍者
　　** 現在開講中で，10月末現在の数字である。11月以降増加する見込みあり。

(2)（12月開始）と（6）（11月開始）で正規学生が0となっているのは，11月に来日する国費研究留学生は，大学院の入学試験に合格して入学するまでは，研究生の身分だからである。

受講者の滞日期間については，石川が得ている情報によれば博士，修士課程在籍者は3～4年，短期の特別研究学生およびJICAの研修員は1年以下，日本学術振興会特別研究員は10ヶ月から1年程度，大学の教職員に関してはまちまちである。JICAの研修員のように名古屋で短期でも日本語集中研修を受けてくる人を除けば，初歩クラスの受講者は来日して一週間から遅くとも数週間のうちに教室に現れることが多い。

次に受講者の国籍について一覧すると，以下のようになる。

クラス	中国	韓国	インドネシア	バングラデシュ	その他	合計
(1)	2	2	3	3	スリランカ，エジプト，チェコ，ルーマニア各1	14
(2)	1	1	2	2	エジプト1	7

(3)	4	0	2	3	エジプト1	10
(4)	5	0	8	2	エジプト1	16
(5)	4	4	4	2	ドイツ，米国各1	16
(6)	2	1	7	0	台湾，エジプト， ルーマニア各1，インド2	15
(7)	3	3	7	0	ルーマニア1，インド2	16
(8)	3	2	1	0	ルーマニア1	7

年齢については，最近のクラスの調査資料しかないが，ほとんどが20代～30代である。独身，既婚の割合は，既婚者がやや多いように思われる。特に博士，修士課程在籍者およびその予定者（大学院研究生）は，既婚者がほとんどで，数ヶ月～1年後に家族が来日するのを心待ちにしている。家族が来てからの彼らは，それ以前よりも精神的な安定が見られ，家族のために，日本語に関しても突然意欲的になる様子が見られたりする。一方，既婚者でも単身で来日している短期の研究者や，JICAの研修員などは，日本語のクラスでも寂しさを垣間見せることがある。

次に，受講者の学習条件について述べる。まず日本語学習歴については，初歩クラスの受講者でも，学習歴の全く無い人から，すでに2～30時間の学習経験のある人までいる。また，学習可能時間に関しては，日本語はおもしろいのでもっと時間をかけて勉強したい気持ちはあるが，大学院での研究のためになかなか時間がとれないとの声もある。自宅等での学習時間についても週1時間がやっとという人（博士課程在籍の学生）から40時間も可能だという人（研究者）までいる。40時間は極端な例で，2～3時間が平均的な時間である。

5. 受講者のニーズと学習目標

このように受講者の背景は一様でないが，そのニーズは，前述したように，日常生活での最低限必要な日本語を習得したいという点では概ね一致している。また，言語の4技能のうち，聞く・話す能力を最優先で習得したいと思っている人がほとんどである。もちろん漢字圏出身の受講者はその有利な条件を生かして，できれば日本語の4技能すべてを上達させたいと考えている人が少なくない。また，非漢字圏の受講者で，滞日期間の長さにかかわらず文字の習得に意欲的な人もいる。これは生活上，やはり文字が読めるほうが便利だからであろう。しかし時間的な制約から，補講の授業はどうしても聞く・話す力の養成を中心に設計される。

学習目標としては，日常生活に必要な基礎的な日本語力をつけること，そのために必要な文法をできるだけ体系的に学ぶこと，日本人とのコミュニケーションに役立つような日本語力の基礎を作ること，などである。

6. 日本語課外補講の内容

6—1. 使用教材

過去2年間の日本語補講クラスで使用されている教科書は，AOTS編『新日本語の基礎Ⅰ』（スリーエーネットワーク，1990）（以下『新基礎Ⅰ』）である。このテキストは，1～25課の構成で，学習時間は100時間である。補講の（1）と（3）の計76時間，（2），（4），（5）の計97時間のそれぞれで終了している。（6），（7），（8）の計102時間では，20時間程度を残して終了する計画である。その後は『新基礎Ⅰ』に続く『新日本語の基礎Ⅱ』あるいは『みんなの日本語　初級Ⅱ』（スリーエーネットワーク，1998）などで，初中級レベルまでの日本語力養成を行う予定である。

いずれのクラスでも文法の提出順序は『新基礎Ⅰ』に従ったが，これ以外に必要に応じて他の教材を用いた。たとえば，ドリルや文法の説明のためには『Situational Functional Japanese』（以下『SFJ』）（筑波ランゲージグループ，1992）や『みんなの日本語　初級Ⅰ』（スリーエーネットワーク，1998）を使用した。精密な聞き取り練習のためには『SFJ』準拠の『わくわく文法リスニング99』（小林他，1995）を，内容をおおまかに把握する聞き取り練習のためには『初級日本語聴解練習　毎日のききとり50日上』（宮城他，1998）を使った。コミュニケーション練習のためには『初級日本語のためのコミュニケーション練習』（TIJ 東京日本語教材開発グループ，1998）や『新基礎Ⅰ』準拠の『クラス活動集101』（高橋他，1994）などを利用した。

『新基礎Ⅰ』を選んだ理由としては，関連（準拠）テキストが充実していることが挙げられる。まず，本冊がローマ字版と漢字かなまじり版の2種類出版されている。これによって文字習得に対して異なる目的をもつ受講者に対応できる。すなわち，読み書きの習得まで希望しない受講者はローマ字版を選択できるし，希望する者は漢字かなまじり版を選ぶことができる。

第2に『新基礎Ⅰ』が，いわゆる発展途上国からの技術研修生を対象に作成されており，そのため学習者が多国籍にわたるという前提で，媒介語を使用しない直接法が採用されていることである。直接法では，授業中，受講者の母語による文法説明や翻訳はあまり行わないので，受講者が各自で各国語訳による説明を読んで，理解しておくことが求められる。そのために本冊の各国語訳（分冊）や各国語による文法解説書が豊富に準備されている。補講クラスにおいても受講者の母語および英語理解能力が一様ではないという事情から，この教材と関連テキストが有効に利用されている。

6—2. 教授法

上で述べた事情から，補講クラスでは原則的に直接法を採用してきた。また，受講者のニーズに従って，聞く・話す中心の授業を行ってきた。聞く・話す中心のクラスでは，状況設定をできるだけ現実のそれに近づける必要がある。教室での学習活動を，実際のコミュニケーションに近づけることにより学習効果が上がると考えるからである。直接法を採用する場合，媒介語を使用できないので，実物や絵，写真，テープ，ビデオなどの視聴覚教材や動作等により，受講者に状況設定などについて正しく伝えることが大変重要となる。また前述のように，教室での文法の説

明等に関しては，母語では行わず，簡単な日本語での説明にとどめる。詳しくは受講者が各国語版の文法解説書を読んでくることで補うようにしている。出席者の顔ぶれによっては，簡単な英語で説明することもある。また特に初歩クラスの初めの頃には，受講者が英語で質問や確認をすることがあるが，これらにはできる限り簡単な日本語と英語の両方で答えるようにしている。

『新基礎Ⅰ』準拠の絵教材は充実しており，語彙や表現，文法事項の導入や練習に大いに役に立っている。会話練習のためのイラストシートもあって，次のコミュニケーション練習へスムーズに進むために有効に利用できる。モデル会話のビデオや，4話から成る復習ビデオも準備されている。特に後者はわかりやすい内容で，かなり自然な会話が楽しめるので，基本的な会話の復習に大変役に立っている。受講者の希望もあって，ビデオ教材は必要に応じて『新基礎Ⅰ』準拠以外のものも積極的に利用している。内容の把握をしたり，音声を消して登場人物になったつもりで，たとえばどういうふうに誘うか，応じるか，断るかなどの受け答えやせりふを考えたりできる。基本的な表現の復習だけでなく，どのように会話を展開させていくかといったコミュニケーション技能の習得にも利用可能である。

6—3. 授業の進め方

新しい課に入ると，まず簡単に文法事項の説明をしてから文型の反復および代入練習を行う。次に，与えられた言葉による機械的な会話練習から，新しく学んだ表現や文型が使える会話練習およびコミュニケーション練習へと進む。この段階では，ある文型や表現を使うように状況が設定されてはいるが，自由に考えて質問したり，答えたりする余地も与えられている。ここである目的を達成することをねらいとしたタスク学習を行うこともある。次に，確認および復習のために，学習した文型や表現を正確に聞き取る練習，そしてテキストの問題を解きながら，文型や表現を視覚的に確認し，最後にビデオやテープを使って，内容把握のための聞き取りのタスク練習を行って，その課は終了する。テストは行わない。平均的なレベルの人が1時間ほどで解答できる分量の宿題を出しているが，前述のように，家での学習時間がなかなかとれない人には提出は困難なようだ。

初歩クラスでは，初めの文型練習や機械的な会話練習の時間を多めに設定するが，クラスが進むにつれて，コミュニケーション練習の時間を増やしていくなど，レベルに応じてそれぞれの練習の時間配分を調整している。初級クラス後半では，新しく学んだ表現だけでなく，既習事項も使って会話を続けていけるような練習にできるだけ多くの時間をとるようにしている。

また，日本での生活に必要な知識を得たり，日本人とのコミュニケーション能力を高めるために，日本の文化や習慣なども，授業との関連で，時間が許す限り，紹介することにしている。

7. 補講の成果

テストを実施していないために，客観的に補講の成果を示すことは困難である。テストを実施しない理由は，前述のように受講者のスタート時点でのレベルの差，自宅での学習時間の長さな

どの学習条件の差，さらには日本語学習の適性など，受講者の日本語能力を一律に測れない要因が少なくないからである。また，研究に多忙な受講者に一層の心理的負担をかけてまでテストを行う必要性があるか，テストの時間を使って，コミュニケーション活動を行う方が効果的ではないかなど，さまざまな理由が挙げられる。

受講者へのアンケートによれば，補講が役に立っているかとの問いに全員が役に立っていると回答している。また，授業内容や教え方についての問いにも好意的な回答が寄せられている。しかし，彼らの国籍，文化的背景，年齢などから，あまり厳しい批判が出されることは予想できないので，本音をうかがうことは難しい。

主観的な評価ではあるが，教える側から見た印象を述べると，各クラスを通じて受講者に共通して言えることは，クラスが進むにつれて日本語に慣れていくということである。そのため新しいことを習っても，反応や理解が早くなる傾向にある。また，何とか知っている言葉で伝えたいことを表現しようとする人は，話すことにさらに慣れていくようである。一方では，日本語が聞き取れても，つい口からは英語が出てしまう人もいる。性格，母語の影響力，日本語学習の適性，自宅での学習可能時間等，さまざまな条件による受講者の個人差が，授業を重ねるにつれて大きくなっていくのが見受けられることもある。

初歩クラスでは，日本語補講の成果は比較的わかりやすいが，レベルが上がるにつれて，その成果を見極めるのは難しくなる。今後，テストに代わる，受講生に心理的負担をかけない評価法を考えていきたい。それによって，授業内容をさらに適切なものにしていくことができるからである。

8. おわりに

アンケートによると，教室での週2時間という学習時間についての受講者の意見は，一様に「少ない」というものであった。もとより出席者は日本語習得に意欲的なため，この回答は当然ではある。研究で忙しくても，日本語のクラスには出席したいと思っているようだ。また，「この日本語クラスが終わった後も日本語の勉強を続けたいか」との問いに全員が「続けたい」と答えている。帰国が間近な人も同様の回答をしており，クラスの途中で帰国する受講者で，教科書の最後までプリントがほしいと申し出てきた人もいたので，帰国してからも，日本語学習を続ける意欲を持っていると考えられる。

実際に本学に到着するまで，受講者の学習条件などは不明のことが多く，またクラスが開始されてからも，日によって出席者の顔ぶれが変わることもある。長期のコースデザインも，毎回の授業計画も立てにくい。しかし熱心な受講者の期待に応えるために，もっとも学習効果を高めることのできる教授法および授業内容を研究し続けていきたい。

参考文献

木村宗男（1982）『日本語教授法―研究と実践』凡人社
田中望（1988）『日本語教育の方法―コース・デザインの実際』大修館書店
高見澤孟（1989）『新しい外国語教授法と日本語教育』アルク
吉村弓子，英矩久子（1990）「豊橋技術科学大学における日本語教育の変遷」豊橋技術科学大学人文社会工学系紀要『雲雀野』12, 49–63.
有馬俊子（1993）『日本語の教え方の秘訣　上・下』スリーエーネットワーク